

## F-5

### トルコ語における事象統合と補文節の選択: コーパスに基づく量的研究<sup>1</sup>

鈴木唯 (東京大学大学院・博士課程)

suzuki.yui.s.y@gmail.com

**【要旨】** 補文節は 1970 年代以来、言語類型論において盛んに研究されてきた。特に、事象統合の文脈で補文節をとりうる述語 (CTP) と補文節との関係が注目されてきた。トルコ語には複数の異なる形態統語的特徴を持つ補文節がある。大きく分けて①定動詞補文節 (補文標識;  $\varphi$ , *diye*, *ki*)、②分詞補文節 (-*Dik*, -*AcAk*)、③動名詞補文節 (-*mA*, -*Iş*)、④不定詞補文節 (-*mAk*) である。本研究はコーパスデータに基づく計量的調査を行い、トルコ語における CTP と補文節の関係を明らかにする。具体的には 50 種類の CTP が 4 種類の補文節うちの補文節をどのくらいの頻度でとるのかを調べ、クラスター分析と主成分分析を行った。調査の結果、CTP は選択する補文節の種類と頻度の点で多種多様である一方で、その CTP と補文節の関係にはパターンがあり、いくつかのクラスターを認めることができることがわかった。さらに、トルコ語における CTP の補文節選択の要因は第一に時間依存性、第二にコントロールの強さであると主張する。こうして、本研究はトルコ語の CTP と補文節における事象統合の研究に貢献する。

#### 1. はじめに

- 補文節とは他の節の項の位置に現れる節のことである (Dixon 2010: 370)。
  - 補文節は 1970 年代以来、言語類型論において盛んに研究されてきた。
  - 特に、事象統合の文脈で補文節をとりうる述語 (complement taking predicates; 以下 CTP) と補文節との関係が注目されてきた (Dixon 2010, Givón 1980, Noonan 2009)。
  - Givón (1980) は、CTP と補文節それぞれが表す事象が複合的な単一事象に統合されるとき、その二つの事象の意味的統合度が強ければ強いほど、CTP と選択された補文節の統語的統合度が強いという相関が見られると指摘した。
  - CTP と補文節の関係を明らかにする方法論として、クラスター分析や多次元尺度構成法などの統計的手法が注目を集めている (Hilpert 2011, Schmidtke-Bode & Diessel 2017, Hilpert 2021)。
- トルコ語<sup>2</sup>には複数の異なる形態統語的特徴を持つ補文節がある (Csato 2010, Göksel & Kerslake 2005, Johanson 2013, Kerslake 2007)。
  - 具体的には、大きく分けて①定動詞補文節 (補文標識;  $\varphi$ , *diye*, *ki*)、②分詞補文節 (-*Dik*, -*AcAk*)、③動名詞補文節 (-*mA*, -*Iş*)、④不定詞補文節 (-*mAk*) がある (表 1)。

表 1: トルコ語における補文節の形態統語論的特徴

補文節の種類	補文節の時制	補文節主語の格	目的語	副詞による修飾	例文
定動詞補文節 ( $\varphi$ , <i>diye</i> , <i>ki</i> )	same with full clause	nominative	accusative	OK	(1)
分詞補文節 (- <i>Dik</i> , - <i>AcAk</i> )	non-future/future	genitive	accusative	OK	(2)
動名詞補文節 (- <i>mA</i> , - <i>Iş</i> )	N/A	genitive	accusative	OK	(3)
不定詞補文節 (- <i>mAk</i> )	N/A	N/A	accusative	OK	(4)

<sup>1</sup> 本稿の作成にあたって、氏家啓吾、谷川みづき、張倩倩、中川奈津子、長屋尚典、林真衣、諸隈夕子、吉田樹生、Yayhoğlu Ogan の各氏から有益なコメントをいただいた。各氏に深く感謝を述べたい。言うまでもなく本稿に残るいかなる誤りも発表者の責任である。また、本研究は JSPS 科研費 21J21799 の助成を受けたものである。

<sup>2</sup> トルコ語は、チュルク諸語オグズ語群に属する。基本語順は SOV で、膠着語タイプの言語である。母音調和や子音交替する音は大文字で書いている。

- (1) *O koş-tu de-di-m.*  
 3SG run-PST say-PST-1SG  
 ‘I said s/he ran.’
- (2) *On-un koş-tuğ-u-nu bil-iyor-um.*  
 3SG-POSS run-PTCP-3SG-ACC know-PRES-1SG  
 ‘I know s/he ran.’
- (3) *On-un koş-ma-sı-nı emret-ti-m.*  
 3SG-POSS run-VN-3SG-ACC order-PST-1SG  
 ‘I ordered him/her to run.’
- (4) *On-u koş-ma-ya zorla-dı-m.*  
 3SG-ACC run-INF-DAT force-PST-1SG  
 ‘I forced him/her to run.’

- そこで、本研究ではコーパスデータに基づく計量的調査を行い、トルコ語における CTP と補文節の関係を明らかにする。
  - **調査方法:** 50 種類の CTP 各 100 例を収集し、それぞれの CTP が 4 種類の補文節のどの補文節をどのくらいの頻度でとるのかを調べ、クラスター分析と主成分分析を行った (第 2 節)。
  - **結果:** 50 種類の CTP×4 種類の補文節の頻度のクロス表を提示し、そのクロス表に基づいた CTP のクラスターを作ることができた。さらに、50 種類の CTP ごとの 4 種類の補文節の頻度という 4 次元データを二次元 (第一主成分と第二主成分) に圧縮し、CTP を二次元上にマッピングした (第 3 節)。
  - **議論:** トルコ語の CTP は選択する補文節の種類と頻度の点で多種多様である一方で、その関係にはパターンがあり、いくつかのクラスターを認めることができる。さらに、トルコ語における CTP の補文節選択の要因は第一に時間依存性、第二にコントロールの強さであると主張する (第 4 節)。

## 2. 調査方法

- 本研究では、コーパス調査から得たデータをもとにクラスター分析と主成分分析を行う。
  - まず、コーパス調査を行い、50 種類の CTP×4 種類の補文節の頻度のクロス表をつくる (第 2.1 節)。
  - そのクロス表をもとに、クラスター分析を行い、50 種類の CTP をクラスターに分類する (第 2.2 節)。
  - 同様のクロス表をもとに、主成分分析を行い、CTP を二次元上にマッピングする (第 2.3 節)。

### 2.1. コーパス調査

- (i) コーパスから 50 種類の CTP (異なる補文節をとりうると予測される 10 の CTP の意味クラス×各 5 種類 (cf. Noonan 2007)) 各 100 例を収集し、(ii) それぞれの CTP が 100 例の中で 4 種類のどの補文節をどのくらいの頻度でとるのかを調べることで、(iii) 50 種類の CTP×4 種類の補文節のクロス表を得た。
- コーパスは、Sketch Engine (Kilgarriff et.al 2014) の Turkish Web 2012 tr (TenTen12) を使用した。
  - 総語数は 4,124,133,118 語である。
  - 品詞タグと形態素注記がついており、Corpus Query Language (CQL) によって検索ができる。
  - インターネット上のオンライン記事、フォーラム、ブログなどのテキストをリソースとしている。
- 50 種類の CTP の用例を次の手順でコーパスから収集した。
  - まず、CQL を用い、[stem="XYZ" & tag="<V[:>].\*"] と検索した (XYZ には当該の動詞語幹を代入)。
  - 次に、検索結果の中から「サンプルをランダムに算出」機能で CTP の用例を 100 例算出した。
  - これを 50 種類の CTP の用例に対して行い、合計 5,000 例を抽出した。
- それぞれの用例の CTP が 4 種類の補文節のうちどの補文節をどのくらいの頻度でとるのかをアノテーションした。
  - まず、収集した CTP 含む文 5,000 例のうち、間違った検索結果、名詞句をとった用例、補文節も名詞句もとらなかった用例を抜き、1,934 例が残った。
  - 次に、補文節をとった CTP 含む文 1,934 例に対して、目的語が①定動詞補文節、②分詞補文節、③

動名詞補文節、④不定詞補文節のうちどの補文節をとっているのかをアノテーションした。

- こうして、50種類のCTP×4種類の補文節の頻度のクロス表を得た。

## 2.2. クラスタ分析

- 50種類のCTP×4種類の補文節のクロス表をもとに、クラスタ分析を行い、4種類の補文節のうちどの補文節をどのくらいの頻度でとるのかという点で50種類のCTPをクラスタに分類した。
  - クラスタ分析は類似したもの同士でグループをつくることでデータを分類する統計手法である。
- クロス表をもとに、50種類のCTPを補文節の種類とその頻度が類似したクラスタに分類した。
- 50種類×50種類ですべてのCTP同士の距離(類似度)を測定し、距離が近いCTPをクラスタとしてまとめた。
  - 分析の種類は階層的クラスタリング、個体間(CTP同士)の距離測定方法はユークリッド距離、クラスタ間の距離測定方法は最遠隣法を採用した。
- これにより補文節の種類選択の頻度が類似したCTPのクラスタを作った。
  - クラスタ数はギャップ統計量により最適数を算出した。

## 2.3. 主成分分析

- 主成分分析を行い、50種類のCTP×4種類の補文節という4次元データのクロス表を二次元(第一主成分と第二主成分)に圧縮し、CTPをクラスタごとに色分けをして二次元上にマッピングした。
  - 主成分分析は、元の情報をできるだけ損なわないように多変数のデータをより少ない合成変数(主成分)に要約する手法である。
- 二次元にマッピングすることで50種類のCTPが4種類の補文節のうちどの補文節をどのくらいの頻度でとるのかについてCTP同士の関係を視覚的に表した。

## 3. 調査結果

### 3.1. 50種類のCTPの選択する補文節の種類とその頻度

- 50種類のCTP×4種類の補文節の頻度を表すクロス表を表2に示した。
- それぞれのCTPはどの補文節をどのくらいの頻度でとるのが異なった。
- 同じCTPでも複数の補文節を選択するものも、一種類の補文節しかとらなかったものもあった。

### 3.2. クラスタ分析

- クラスタ分析の結果、補文節をとった47種類のCTPを7つのクラスタに分類した(図1)。
  - そもそも補文節をとらなかった3種類のCTP(*bitir* 'finish', *kokla* 'smell', *tat* 'taste')はクラスタ分析から除く。
- こうしてできた7つのクラスタがどの補文節をどのくらいの頻度でとったのかを図2に示した。
- どの補文節をどのような頻度でとるかの点で分類されたCTPのクラスタができた。
  - クラスタA~Fはそれぞれ、は定動詞補文節がほとんどのグループ、分詞補文節がほとんどのグループ、定動詞補文節と分詞補文節が多いグループ、動名詞補文節がほとんどのグループ、動名詞補文節と不定詞補文節が多いグループ、不定詞補文節がほとんどのグループであった。
  - 定動詞補文節と不定詞補文節を多くとるグループなどはなかった。
- 補文節を高頻度でとるこのようなクラスタとは対照的に、補文節を低頻度でとるクラスタもあった。
  - クラスタGはそもそも補文節をとることが少なく、このクラスタには心理動詞や感覚動詞などが含まれた。

表 2: 50 種類の CTP × 4 種類の補文節の頻度

CTP	定動詞	分詞	動名詞	不定詞
<i>anla</i> 'understand'	17	33	1	0
<i>arzu et</i> 'desire'	6	0	36	27
<i>başar</i> 'success'	0	1	0	70
<i>başla</i> 'begin'	0	0	0	54
<i>becer</i> 'success'	0	0	2	41
<i>bil</i> 'know'	16	30	2	4
<i>bildir</i> 'report'	1	69	0	1
<i>bitir</i> 'finish'	0	0	0	0
<i>de</i> 'say'	65	0	0	0
<i>dene</i> 'try'	0	1	1	17
<i>devam et</i> 'continue'	0	0	0	33
<i>dile</i> 'wish'	4	0	8	1
<i>düşün</i> 'think'	16	34	1	11
<i>duy</i> 'hear'	1	6	0	1
<i>emin ol</i> 'be sure'	27	37	0	1
<i>emret</i> 'order'	4	1	47	5
<i>endişelen</i> 'worry'	3	0	3	0
<i>fark et</i> 'notice'	3	34	0	3
<i>garip gel</i> 'be odd'	0	1	27	12
<i>gör</i> 'see'	1	19	4	0
<i>hisset</i> 'feel'	4	16	1	0
<i>ikna et</i> 'persuade'	0	7	2	19
<i>inan</i> 'believe'	4	43	1	0
<i>iste</i> 'want'	2	0	24	42
<i>izin ver</i> 'allow'	0	0	49	4
<i>kaygılan</i> 'be anxious'	8	9	13	1
<i>keşfet</i> 'realize'	0	12	1	2
<i>kokla</i> 'smell'	0	0	0	0
<i>kork</i> 'afraid'	6	3	17	10
<i>kuşkulanan</i> 'worry'	2	23	8	0
<i>mani ol</i> 'prevent'	0	0	51	2
<i>mecbur et</i> 'force'	0	0	5	58
<i>merak et</i> 'worry'	16	29	1	0
<i>önemli ol</i> 'be important'	0	2	22	7
<i>önle</i> 'prevent'	0	0	45	4
<i>pişman ol</i> 'regret'	1	23	0	2
<i>rica et</i> 'ask'	2	0	57	0
<i>sona er</i> 'finish'	0	0	4	0
<i>sor</i> 'ask'	40	13	0	0
<i>söyle</i> 'say'	2	68	2	0
<i>söz ver</i> 'promise'	12	15	1	6
<i>şüphelen</i> 'doubt'	2	14	6	0
<i>sürdür</i> 'keep on'	0	0	26	8
<i>tat</i> 'taste'	0	0	0	0
<i>um</i> 'hope'	21	30	6	5
<i>umit et</i> 'hope'	11	32	32	14
<i>unut</i> 'forget'	4	16	3	9
<i>üz</i> 'make sad'	0	0	15	2
<i>üzül</i> 'be sad'	5	1	5	0
<i>yalanlan</i> 'deny'	1	0	0	0

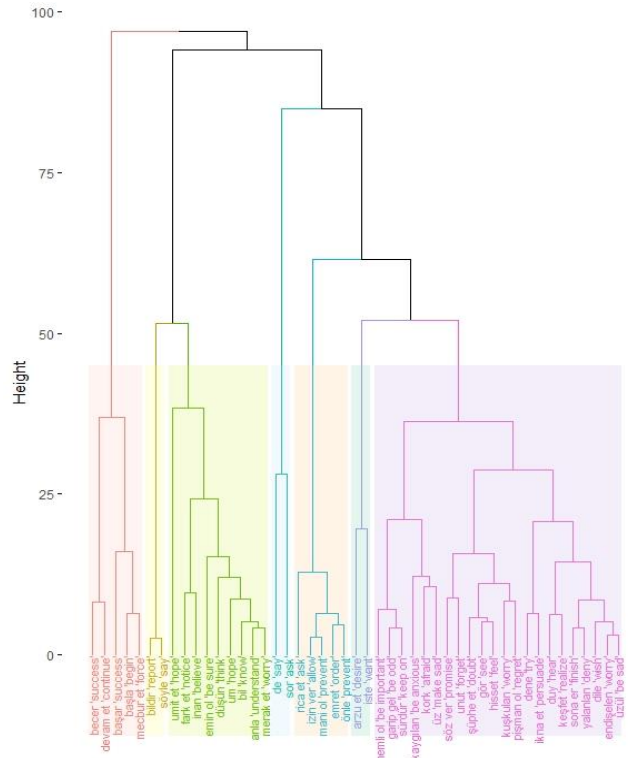


図1: デンドログラム



図2: クラスターごとのCTPの補文節の選択とその頻度

### 3.3. 主成分分析

- 主成分分析を行い、50種類のCTPごとの4種類の補文節の頻度の情報という4次元データを二次元(第一主成分と第二主成分)に圧縮し、CTPを二次元上にマッピングした(図2)。
- CTPをクラスターごとに色分けすることでそれぞれのクラスターの二次元上の位置を可視化した。
- 圧縮された二つの次元について、x軸に第一主成分、y軸に第二主成分をとった。
- x軸とy軸のパーセンテージは、各主成分が元のデータの何割を説明することができるかを示す。
  - 第一主成分は元データの約41%、第二主成分は約26%説明できていることがわかる
- 補文節の選択とその頻度が類似しているCTPは、互いに近くにプロットされる。
  - 例えば、*söyle* 'say' と *bildir* 'report' は、補文節の選択とその頻度の傾向が非常に類似しているため、互いに近い位置にプロットされている。
- 矢印は各変数すなわち4種類の補文節の二次元上の方向性を示す。
  - 左に行くほど分詞補文節や定動詞補文節をとりやすく、右上に行くほど不定詞補文節、右下に行くほど動名詞補文節をとりやすいCTPが表されている。
- CTPの位置が矢印の方向に進めば進むほど、その矢印の補文節を選択する頻度が高い。
  - 例えば、*söyle* 'say' と *bildir* 'report' は分詞補文節の矢印の方向に進んだ先に表されており、分詞補文節をとる頻度が非常に高いことがわかる。
  - 一方で、*rica et* 'request' と *mani ol* 'prevent'などは動名詞補文節の矢印の方向に進んだ先に表されており、動名詞補文節をとる頻度が非常に高いことがわかる。
  - 中央には補文節をとる頻度が少ないCTPが集まっていることがわかる。

## 4. 議論

### 4.1. トルコ語におけるCTPと補文節の関係は種類と頻度の点で多種多様である

- それぞれのCTPはどの補文節をどのくらいの頻度でとるのが異なった(第3.1節)。
- この観察は、トルコ語においてCTPと補文節の関係は一対一対応ではなく、様々な種類と頻度の対応関係があることを意味する。
  - 例えば、*başla* 'begin' は不定詞補文節のみをとった一方で、*sürdür* 'keep on' は動名詞補文節と不定詞補文節の両方を多く取った。
- これまでのCTPと補文節について記述研究(Csato 2010)はエリシテーションに基づいている一方で、本研究は実際の言語使用における頻度をもとに実証的に示した。
  - 例えば、同じ発話動詞でも *sor* 'ask' は定動詞補文節をとりやすいが、*söyle* 'say' は分詞補文節をとりやすいという、エリシテーションに基づく先行研究では指摘されていない点を明らかにできた。

### 4.2. トルコ語におけるCTPと補文節の関係にはパターンがある

- どの補文節をどのような頻度でとるかの点で異なるCTPのクラスターができた(第3.2節)。
- この観察から、CTPが選択する補文節とその頻度にはパターンがあることがわかる。
- 補文節についての類型論的研究(Noonan 2010)で提示されていた意味クラスごとにきれいに補文節の選択の傾向が分かれるわけではなかったが、本研究では経験的にパターンを示すことができた。

### 4.3. トルコ語におけるCTPの補文節選択の要因は時間依存性とコントロールの強さである

- 主成分分析を行い50種類のCTPごとの4種類の補文節の頻度という4次元データを二次元(第一主成分と第二主成分)に圧縮し、クラスターごとに色分けしたCTPを二次元上にマッピングした(第3.3節)。



- この二つの主成分は CTP の補文節の選択の要因を表す。
  - そこで、第一主成分は時間依存性、第二主成分はコントロールの強さに対応すると分析する。
- まず、第一主成分 (x 軸) について考えると、CTP がどの種類の補文節をどのくらいの頻度でとるのかを決定する最も大きな要因は、補文節の事象の CTP の事象への時間的依存性と分析できる。
  - 時間的依存性があるとは、補文節の表す事象の時間が CTP の表す事象の同時なのか前後なのかについて CTP の意味によって決定できるということである (Noonan 2010)。
  - 図 3 において、定動詞補文節と分詞補文節の矢印は負の方向、動名詞補文節と不定詞補文節の矢印は正の方向であることは、CTP の位置が負の方向に進めば進むほど定動詞補文節または分詞補文節をとる頻度が高く、CTP の位置が正の方向に進めば進むほどその CTP は動名詞補文節または不定詞補文節をとる頻度が高いことを意味する。
  - このような補文節の選択の傾向を表す x 軸において、負から正にかけて時間依存性がある CTP のクラスターから時間的依存性がない CTP のクラスターが位置していると分析できる。
    - 負の方向にあるクラスター A~C は直接/間接引用発話動詞や認知動詞を含み、補文節が表す事象の CTP が表す事象への時間依存性がない (e.g., 発話動詞: *On sene önce doğdu/On ay sonra doğacak dedi.* 「10 年前に生まれた/10 か月後に生まれると言った。」)。
    - 正の方向にあるクラスター D~F は指示動詞、成否動詞、願望動詞、局面動詞、使役動詞などを含み、補文節が表す事象の CTP が表す事象への時間的依存性がある (e.g., 指示動詞: *Onun koşmasını emretti.* 「走るよう命じた。」/局面動詞: *Koşmaya başladı.* 「走り始めた。」)。
    - 中央にあるクラスターは心理動詞や感覚動詞などを含み、補文節をとる頻度がそもそも少なく、特徴づけができない。
  - このように、動詞補文節と分詞補文節 vs 動名詞補文節と不定詞補文節という x 軸に位置づけられる CTP クラスターの意味的特徴から、補文節の事象の CTP の事象への時間的依存性が補文節の選択を決定する要因であると分析できた。
- 同様に、第二主成分 (y 軸) について考えると、CTP の補文節の選択を決定する二つ目の要因は、CTP 動作主の補文節事象へのコントロールの強さと分析できる。
  - コントロールがあるとは CTP 動作主が補文節事象の実現を直接的に操作できる状態であるということである。
  - 図 3 において、不定詞補文節の矢印は正の方向、動名詞補文節の矢印は負の方向であることは、CTP の位置が正の方向に進めば進むほどその CTP は不定詞補文節をとる頻度が高く、CTP の位置が負の方向に進めば進むほどその CTP は動名詞補文節をとる頻度が高いことを意味する。
  - なお、時間的依存性がなければコントロールもないため、時間的依存性とコ

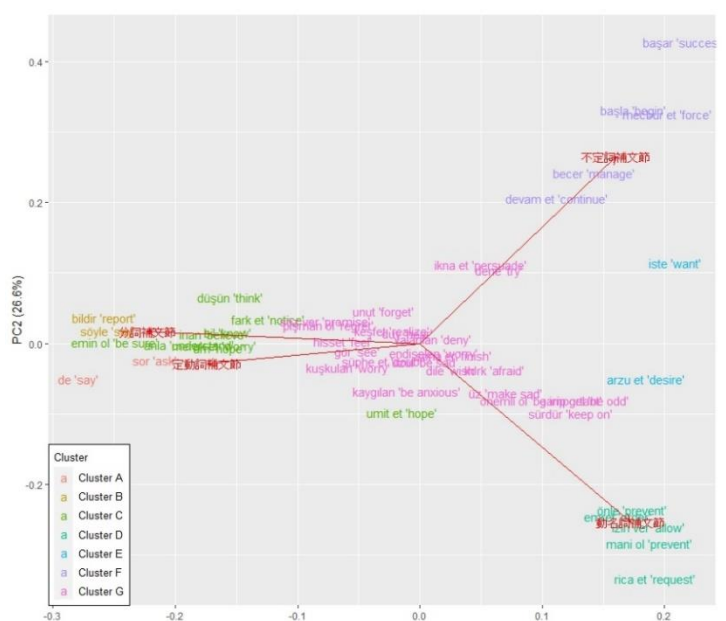


図3: 主成分分析の結果

ントロールの強さは独立ではないと考え、x軸の負にあるクラスターを抜いて以下では議論する。

- このような補文節の選択の傾向を表す y 軸において、負から正にかけてコントロールがない事象の CTP のクラスターからコントロールがない事象の CTP のクラスターが位置していると分析できる。
  - ・ 正の方向にあるクラスターF は局面動詞、成否動詞、使役動詞を含み、コントロールがある (e.g., 局面動詞: *Koşmaya başladı*. 「走り始めた。」/使役動詞: *Koşmaya mecbur etti*. 「走るのを強制した。」)。
  - ・ 負の方向にあるクラスターD は指示動詞、非成否動詞を含み、コントロールがない (e.g., 指示動詞: *Onun koşmasını emretti*. 「走るよう命じた。」)。
  - ・ 中央にあるクラスターは願望動詞であり、コントロールがある場合とコントロールがない場合もある (e.g., *Koşmak istiyorum / Koşman istiyorum*. 「走りたい。」/「あなたに走ってほしい。」)。
- このように、不定詞補文節 vs 動名詞補文節という軸に位置づけられる CTP クラスターの意味的特徴から、CTP の事象の動作主の補文節の事象へのコントロールの強さが補文節の選択を決定する要因であると分析できる。
- こうして、CTP と補文節の多種多様なパターンについて、CTP の補文節選択の要因は第一に時間依存性、第二にコントロールの強さであるとわかった。

## 5. 結論

- 本発表ではコーパスデータから作成した 50 種類の CTP×4 種類の補文節のクロス表をもとにクラスター分析と主成分分析を行うことで以下のことを主張した:
  - トルコ語における CTP と補文節の関係は種類と頻度の点で多種多様である。
  - 一方でその CTP と補文節の関係にはパターンがあり、いくつかのクラスターを認めることができる。
  - そのパターンについてトルコ語における CTP の補文節選択の要因は第一に時間依存性、第二にコントロールの強さである。
- 本研究はこのような CTP と補文節の関係を頻度の観点から初めて体系的に示した研究である。
  - ・ エリシテーションではなくコーパス調査を行うことで実際の言語使用における傾向を観察した。
  - ・ 先行研究では分詞補文節や動名詞補文節が注目されてきたが、本研究は定動詞補文節や不定詞補文節も含めて体系的に見た。
  - ・ さらに、CTP の補文節の選択の要因を経験的かつ実証的に明らかにした。
- 今回は十分に議論できなかったが、本研究が指摘した二つの要因は事象統合に関わるパラメータである。
  - 意味的にこの二つの点で統合度が高い CTP は、統語的な統合度が高い補文節を選択するということが予測される。
  - この点については今後の課題としたい。

【参考文献】 Csato, Eva A. 2010. Two types of complement clauses in Turkish. In Julian Rentsch & Hendrik Boeschoten (eds.), *Turcology in Mainz*, 107–122. Wiesbaden: Harrassowitz./Dixon, R. M. W. 2010. *Basic linguistic theory*. Vol. 2: Grammatical topics. Oxford: Oxford University Press./Givón, Talmy. 1980. The binding hierarchy and the typology of complements. *Studies in Language* 4. 333–377./Göksel, Ash & Celia Kerslake. 2005. *Turkish: A comprehensive grammar*. Oxon: Routledge./Hilpert, Martin. 2011. Dynamic visualizations of language change: Motion charts on the basis of bivariate and multivariate data from diachronic corpora. *International Journal of Corpus Linguistics* 16(4). 435–461./Hilpert, Martin. 2021. *Ten Lectures on Diachronic Construction Grammar* (Distinguished Lectures in Cognitive Linguistics). Vol. 26. Brill./Johanson, Lars. 2013. Selection of subjunctors in Turkic non-finite complement clauses. *Bilig: Journal of Social Sciences in Turkish World* 67. 73–90./Kerslake, Celia. 2007. Alternative subordination strategies in Turkish. In Jochen Rehbein, Christiane Hohenstein & Lukas Pietsch (eds.), *Connectivity in grammar and discourse*, 231–258. Amsterdam: John Benjamins./Kilgarriff, Adam, Vít Baisa, Jan Bušta, Miloš Jakubiček, Vojtěch Kovář, Jan Michelfeit, Pavel Rychlý & Vít Suchomel. 2014. The Sketch Engine: Ten years on. *Lexicography* 1: 7–36. <https://doi.org/10.1007/s40607-014-0009-9>./Noonan, Michael. 2007. Complementation. In Timothy Shopen (ed.), *Language typology and syntactic description*, vol. 2: Complex Constructions, 52–150. Cambridge, MA: Cambridge University Press./Schmidtke-Bode, Karsten & Holger Diessel. 2017. Cross-linguistic patterns in the structure, function, and position of (object) complement clauses. *Linguistics* 55(1). 1–38.